

新至民中学校が目指した地域との連携：  
「学校は街角」となり得たか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 忠五郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/6861">http://hdl.handle.net/10098/6861</a>

## 新至民中学校が目指した地域との連携

…「学校は街角」となり得たか…

山下 忠五郎

### 1. はじめに

平成20年4月、福井市至民中学校は全国で初めてとなる「異学年型教科センター方式」の学校として、福井市南江守町に移転開校した。

私は、移転開校2年前の平成18年4月1日、校長として至民中学校に赴任した。赴任する一週間ほど前ごろから、至民中学校は新聞紙上を賑わしていた。新年度からの「70分授業導入」に関わる記事である。そして、教職員の異動が紙上発表されると、至民中学校の生徒を名乗り「今度、至民中学校に来る校長に話がしたい」との電話もかかってきた。このように、私はなんとも賑やかしい中で至民中学校への異動となった。

そして、着任早々の4月4日には、2人の3年生女子生徒が、意見書を携えて私を訪ねてきた。話を聞いてほしいと言うのである。話とは、「70分授業」と「2年から3年の進級に伴うクラス替え」について「やめてほしい」という要望であった。それまで至民中学校では、1年から2年への進級時にクラス替えを行い、2・3年は同じメンバーで卒業を迎えていたのである。しかし、学校は、当時の生徒達の間関係や学級の実態から学級を再編成し、新たな気持ちで1年のスタートを切る方が生徒の成長に繋がると判断したのであった。

至民中学校の生徒は、ほぼ100%が社南小学校の卒業生である。しかし、たいがいの中学校は複数の小学校から進学してくる。進学によって新しい人間関係が生まれ、活動内容やその範囲が広がる等、自分を取り巻く世界が大きく一変する。そして、このことが子どもたちを成長させてもきたのだ。至民中学校の生徒達は、こういった点ではちょっと可哀想な状況に置かれているとあってよい。この年度以降、至民中学校では、毎年クラス替えを行っている。

さて、このように素敵な(?)歓迎を受けながら新学期を迎えたが、今度は私自身が一服してしまうのである。

至民中学校は、2年後の新築移転開校に向け「現在の中学校教育のありようを根本から見直し、新たな中学校教育について、その理念や方法を明らかにする」というミッションを背負っていた。中学校教育の未来を切り拓いていく先駆者になれというのだ。前例(お手本)のない学校運営を求められ、私は、おおいに悩むのである。

がしかし、スタッフ(異動してきたメンバーを除いて)は、前年度末に「70分授業」の導入を決め、授業改革を核とした学校改革への決意表明をしていた。彼らの強い決意にかけようと、全幅の信頼を置いて任せることにした。お手本がないんだから、「やってみて、うまくいかなかった

たらずぐ変えればいい、やり直せばいい」、そして、「前例を踏襲していたのでは使命を果たすことは出来ない」ということを肝に銘じて取り組んでいくことにしたのである。

平成18年度以降の研究紀要を見ればわかるとおり、スタッフのチャレンジスピリットが前例のない学校を創りあげていった。スタッフの熱い熱い思いに、失敗を恐ず挑戦し続けた勇氣に、思いの丈とは違ったことも多々あった中で不平・不満を封印しての取組に、心からの感謝と敬意を表したい。新至民中学校はこういったスタッフが個々のタレント性を存分に発揮しながら互いを支え合い創りあげたものであると自負している。

私たちは、3つの柱を掲げて学校改革に取り組んだ。ここでは、そのうちの「地域連携」について振り返ることにする。地域連携とどのように向き合ってきたのかということと、至民中学校が目指した「日常的な交流を通して中学生も地域の人たちも互恵的に学びあう学校」になり得たのかについて考えてみたい。

## 2. 地域連携... はじまりは？

昭和47年4月1日、私が教員に採用された日である。その頃、「地域連携」という言葉があったのだろうか...？地域の人たちが学校に来ること自体が、まず無かったように記憶しているのは私だけだろうか。保護者が、入学式、卒業式、PTA総会、保護者懇談会に学校を訪れるくらいだった。保護者や地域と学校が、子どもと教員が、保護者と教員が良好な関係にあったのだと思う。私も保護者としての立場では、学校を、先生方を信頼してお任せしていた。一方で、今のように学校へ行っている時間がなかったのかも知れない...

保護者の学校への関心が高まってきたのは、少子化、核家族化などが顕著になってきた頃からはなかっただろうか...？そして、校内暴力や対教師暴力、学級崩壊、凶悪な少年犯罪の増加、いじめ問題、学校週5日制、テレビゲームや携帯電話などの普及などがさらに関心を高めていった。関心が高じて「クレーマー」と呼ばれる輩が学校にも出現してくるのでもあった。

こういった現状を改革すべく、平成12年3月、内閣総理大臣のもと、教育改革国民会議が発足し、その年の12月22日には「教育改革国民会議報告 教育を変える17の提案 - 」が取りまとめられた。例の「教育という川の流れの、最初の水源の清冽な一滴となり得るのは、家庭教育である」で始まる提案である。

報告書は、「教育こそ人間社会の存立基盤であり、日本人や日本社会は、これまで、教育を大切にし、その充実に力を注ぎ、時代の要請に応えるそれなりの成果を上げてきた。

しかし、いまや21世紀の入口に立つ私たちの現実を見るなら、日本の教育の荒廃は見逃せないものがある。いじめ、不登校、校内暴力、学級崩壊、凶悪な青少年犯罪の続発など教育をめぐる現状は深刻であり、このままでは社会が立ちゆかなくなる危機に瀕している。」と断言している。このような現状を改革し、日本と世界の未来を担う次世代の教育をよりよきものにするための視点を三つ上げている。

子どもの社会性を育み、自立を促し、人間性豊かな日本人を育成する教育を実現するという視点

一人ひとりの持って生まれた才能を伸ばすとともに、それぞれの分野で創造性に富んだリーダーを育てる教育システムを実現するという視点

新しい時代にふさわしい学校づくりと、そのための支援体制を実現するという視点

そして、「基本に立ち返る。改革の具体的な動きをつくっていく。」という考え方に立って「教育を変える17の提案」を行ったのである。

地域連携については、「4、新しい時代に新しい学校づくりを」で、「地域の信頼に応える学校づくりを進める」ことを提案している。具体的には、次の4つである。

保護者は学校の様々な情報を知りたがっている。開かれた学校をつくり、説明責任を果たしていくことが必要である。目標、活動状況、成果など、学校の情報を積極的に親や地域に公開し、学校は、親からの日常的な意見にすばやく応え、その結果を伝える。

各々の学校の特徴を出すという観点から、外部評価を含む学校の評価制度を導入し、評価結果は親や地域と共有し、学校の改善につなげる。通学区域の一層の弾力化を含め学校選択の幅を広げる。

学校評議員制度などによる学校運営への親や地域の参加を勧める。良い学校になるかどうかはコミュニティ次第である。コミュニティが学校をつくり、学校がコミュニティをつくる。

親が学校の活動やPTA、地域の教育活動に時間を取れるようにするなど企業も協力する。

報告書は、最後に「子どもはそれぞれの家庭にとってだけでなく、社会全体、人類共通の宝であり希望である。教育は本来、親、当人、社会全体が共同して行うものであり、教育の問題を家庭や学校だけに任せるのではなく、国民一人ひとりが真剣に考えて取り組むことが必要である。」と明記している。学校と地域の関係が新しい時代の新しい学校づくりの重要課題としてクローズアップされたのである。

教育改革国民会議の報告を境に、国を挙げての教育改革が始まった。教育基本法をはじめとした教育三法の改正、学習指導要領改訂へと突っ走っていったのである。

学校では「説明責任」「開かれた学校づくり」「情報公開」「学校評価 外部評価」「学校評議員制度」など、保護者や地域との新たな関わり方が始まるのである。また、平成14年度からの学校週5日制は、「地域の子どもは地域で育む」という気運を高めた。

「開かれた学校づくり」と「地域の子どもは地域で育む」ことをキーワードとして、学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たす中で連携・協力することにより、地域ぐるみでの教育改革が始まった。ここに、地域連携は教育改革の重要なファクターとなるのである。

### 3. 私と地域連携

さて、私の中で地域連携を意識し始めたのは、40代半ばから2つの小学校で勤務した7年間の経験であった。そして、私の地域連携を決定づけたのは、初めて校長として勤務した中学校での出来事だった。

#### (1) 保護者と地域を意識する

平成4年、15年ぶりに小学校に勤務することになった。広々とした田園風景が広がる福井市岡保小学校だ。保護者から「前の担任の先生より宿題が少ない。もっと沢山宿題を出してください」とか、私が「親子で短歌づくりや俳句づくりをしましょう」と呼びかけると保護者が積極的に参加してくるなど、学校教育に対する保護者の関心の高まりを今までになく感じたことを覚えている。

この保護者の期待に、「学校での日常の可視化」と「こどもの学びへの保護者の参画」とで応えていこうと考えたのである。具体的には、次のような取組を行った。これらの取組を通して保護者との信頼関係の構築を目指した。

「学級だより」...子ども達の学校（主に学級）での日常を発信

「学習に保護者を巻き込む」

…「わたしの命のルーツ」「たばこの害」（学級指導）、「短歌作り」「俳句作り」（国語）  
「バルセロナオリンピック、マラソン記録に挑戦」「器械運動」「陸上運動」（体育）  
「学級担任の通知票」…親子で学級担任（私）を評価  
生徒指導だより「わらんべ」…全保護者に行事等を中心に学校の今を発信  
学びを形に…「親子作品集 短歌と俳句」「詩集 忠」「卒業文集」  
などである。

〈学級だよりに寄せられた保護者の声より〉

- 「翔き」（学級だよりのタイトル）をいつも楽しみにしています。発行まで間があるとどうしたの？と息子に聞きます。
- 早いもので今年ももう少しで終わりです。わが子もあと少しで小学校生活を終えようとしています。今年は「翔き」を通して学級の様子がよくわかり、子どもと一緒に歩んできたという感じでした。
- 「詩集 忠」読みましたよ、読みましたよ！ 一人一人の顔を思い浮かべながら、あの子がこんな詩を、この子がこんな詩を作ったのね…と感心しながら読みました。読み進んでいくうちに、いつのまにこんな豊かな感性が育っていたのかと思うと目頭が熱くなりました。
- いよいよカウントダウン。あっという間の一年間でしたが、今振り返ってみますと充実した中身の濃い一年だったと思います。大変幸せだったと思います。また、俳句に短歌、詩集、楽しいスナップ etc…そして、一年間がぎっしり詰まった翔き、どれもこれも宝物です。大切にしたいと思います。

子ども・保護者との信頼関係は情報の提供であり、情報の共有であると得心した。この小学校での5年間の手応えが、地域との関わり方の一つの指針となった。

こんなかたちで保護者を、地域を意識し始めたのである。

## （2）地域の力を実感する

平成9年4月1日、幼稚園を併設する複式の小学校に新任の教頭として勤務することになった。自然豊かな山あいにある美山町下味見小学校だ。少子化による統廃合が行われ、今はその校舎だけが残っている。

当時の町長さんのお話はいつも「教育が第一」から始まるように、この町では教育をとて大切にしていた。それぞれの地域では地域の学校を、町は全ての小・中学校をしっかりと支えていた。地域ぐるみで子どもを育てる、地域の子どもは地域で育てる文化が息づく町だった。

この町の体育大会は学校と地区が一体となって行われていた。地区民がこぞって参加し、秋の1日を楽しむのである。ここで、私はそれまでには見たことのない光景に出会った。その地区の中学生全員が参加していて、用器具の準備などの裏方を一手に引き受けていたのだ。この町のどの地区でも、中学生が体育大会を支えているのである。中学生の働きぶりを見た子ども達には、中学生になったら自分が体育大会を支えるのだという意識が自然と育まれる。地域の大人達は、彼らに中学時代の自分を重ね合わせながらたくましく成長した後輩達を温かく見守る。地域の子どもは地域で育てる文化が継承されていたのである。

下味見小学校では、毎年秋、収穫感謝祭が行われる。地域の方々も楽しみにしている学校行事だった。子ども達は、「ふるさと学習」（総合的な学習の時間）で学んだことを発表したり、模擬店を出したりして地域の方々のおもてなしをする。保護者は焼き芋（子ども達が育て、収穫したサツマイモ）とおでん（各家庭で育てた大根や里芋など）でおもてなしを、地域の方々はお漬け

物など各家々に伝わる料理でおもてなしをする。子どもの、保護者の、地域の方々のそれぞれのおもてなしが子ども達の心を育てないわけがない。ここにも、地域ぐるみで子どもを育てる文化が根づいていたのである。

収穫感謝祭で忘れられないことがもう一つある。ふるさと学習の発表で、2年生の男の子が原稿用紙2枚分の発表を原稿を見ずに発表したことだ。担任の先生はとっても心配だったようであるがやり遂げたのである。家で、一生懸命で練習したそうだ。地域の人たちの前で発表するということが、彼に必死の練習をさせ、原稿なしで堂々と発表させたのだ。校内マラソン大会もしかりである。練習の時は、途中で歩くことのある子どもも、応援に駆けつけたお爺ちゃん、お婆ちゃんたちの前では走り通してしまうのだ。地域の人たちに見られていると、子どもは一生懸命になる。地域の眼差しが子どもの成長を後押ししているのである。

「地域の力」、「地域ぐるみで子どもを育てる」を具体的に実感した2年間であった。そして、私の中に地域連携の種が宿ったのだ。

### (3) 地域連携がはじまる

平成16年4月1日、新任の校長として、福井市森田中学校に赴任した。

第1回学校評議委員会、自治会連合会長でもあったY氏に、「校長、中学校は敷居が高こうてあかんわ・・・」と強烈な先制パンチを見舞われたのである。この先制パンチこそが私の地域連携の原点である。Y氏は、さらに「子どもに挨拶をせいで言っていながら、うらがが挨拶しても知らん顔して通り過ぎてしまう先生がいるぞ・・・」「子どもらの自転車の乗り方、なってえんぞ・・・。歩くのも道一杯やし、何教しえてるんや・・・」と続けた。子ども達をしっかりと育ててほしい、先生方に期待しているという、我々教員に対する叱咤激励であった。

この一連のY氏の発言は、小学校に比べて中学校の方が地域との関係をあまり重要視してこなかったことに起因していると考えられた。地域との関わりや地域の方々との交流の機会を増やし、地域に信頼される学校にしていかなければならないと強く感じたのである。

敷居が高いということは、中学校へ行きにくい、地域と距離ができてしまっているということだろう。とにかく、「敷居を低く」しなければならないのだ。まずは、保護者の方々、地域の方々に学校へ来ていただくとう「学校開放日」を創設した。学校を開き、生徒・教員・学校が何をしているのか、活動そのものを見てもらうことから始めた。学校開放日の案内を全戸に回覧したり、生徒が制作したポスターを各町内の掲示板に掲示するなどして、地域の方々の参加を促した。さらに、生徒が地域で活動する機会を増やし、地域の方々にその姿がより一層見えるようにしていった。福井を美しくする運動への参加、森田駅伝への出場・スタッフボランティア、夏祭りでのヨサコイ踊りなどで地域へ出ていったのである。こういった「地域に見える活動」を通して「敷居を低く」していこうと考えたのである。

「校長、中学校は敷居が高こうてあかんわ・・・」から始まった「地域に見える活動」は至民中学校でも地域連携の柱として取り組むことになるのである。

## 4. 至民中が目指した地域との連携

至民中が目指した地域連携は、「学校は街角」という発想で、「常に異年齢の人たちが行き交う学びの場」とするということであった。日常的な交流を通して中学生も地域の人たちも互恵的に学びあう学校にしようというのだ。互恵的な地域連携である。

この発想の源は、福井市教育委員会が、平成16年度に示した新至民中学校の基本構想にある。

人間づくりの行える中学校（他者との協働）

真の学力を育てる中学校（教科センター方式）

地域を創造する中学校（子どもの地域づくり参加・地域の学校づくり参加）

の三つである。

この構想の実現に向け、校舎建築から学校運営、教育課程の編成に至るまで、設計者をはじめ、教員、生徒、保護者、地域住民はもとより、大学研究者も含めて、事前の協議やワークショップ等を行いながら準備が進められた。そして、あの「柔らかな学校」ができあがったのである。

「地域を創造する中学校」やって？「学校は街角」やって？さて、どうしたものか。

地域連携の取組について、研究主任の牧田教諭は当初、「開校して少し落ち着いてから」と考えていたようであるが、私は、前任校での経験から「学校を地域に開くこと」は待ったなしだと考えていた。私の至民中教育設計図には「地域に見える活動」の実践を明記し、取り組むと決めていたのである。

生徒には地域の一員としての役割を果たすとともに、地域の一員としての自覚を高め、地域の方々には地域で子どもを育てる気運が高まることを願っての取組である。

この取組を切り口に、「学校は街角」という発想の具現化に繋がるのかどうかは、まだまだ皆目見当がつかなかった。

## 5．地域との連携を振り返る

平成18年、4月24日（月）当時の福井市教育長、渡邊本爾氏が来校。全職員に対して、「新至民中学校に託す願い」を熱く語られたことは、今も忘れることのできない出来事である。教育長は、「地域からも、市民からもおおいに注目されている」と、我々に期待の言葉を残して帰られた。

私は、その言葉を「何処にもない中学校を創れ...」と理解をした。

この年、至民中学校は、福井市の「特別研究指定校」に指定され、中学校教育の抱える問題点や課題にいかに対処し解決していくか、次なる時代を担う中学生にとって今何が求められ、どうあるべきなのか、そうした問いに全力で応える中学校として、歩み始めたのである。

三つの重点課題を掲げて挑戦が始まった。

一つは、学力充実の場としての「教科センター」の運営。

二つめは、生活の場としての「異学年クラスター」の運営。

三つめは、社会の一員として生きていける力を育む「地域連携」のあり方。

この3本柱を掲げ、授業改革を中核に据えた学校改革がはじまったのである。その経緯は、毎年開催される「公開研究会」や「研究紀要」、福井大学の「ラウンドテーブル」などを通して発信されているところである。

### （1）平成18年度

さて、三つめの柱「地域連携」は、森田中学校での「地域に見える活動」の経験を生かす形で始まった。

一つは、「みんなで行こさ 至民中へ！」という取組である。地域の方々に学校へ来ていただき、生徒・教員・学校の活動を直接見てもらう機会を設けたのだ。学校行事を中心に学校公開日として、地域に学校を開くことにしたのだ。なお、このネーミングは、京都市が学校改革の一環として取り組んでいる「そうだ、学校へ行こう」からヒントを得たものである。

もう一つは、「地域行事への参加とボランティア活動の推進」である。生徒が地域で活動する機会を増やし、その姿を地域の方々に見えるようにするものだ。至民中学校では、これまでも「三世代クリーン作戦」、「江端川フラワーロード推進事業」など地域の事業にボランティアとして参加していた。ブラスバンド部は地区体育祭の開会式に演奏ボランティアとして参加していた。この実績を生かしながら、さらに活動の機会を増やしていくことにしたのである。

初めての試みである「みんなで行こさ 至民中へ！」は、年度はじめに、その趣旨（下記参照）と年間行事予定を記載したリーフレットを作成し配布した。（全保護者に配布、地域へは回覧板で周知）また、前月中に、次の月の予定を回覧板でお知らせして周知を図りながら取組が始まったのである。

本校では、平成20年の新至民中学校の開校に向け、『挑戦！新至民中教育』のスローガンのもと新たな取組を進めています。その一つとして、地域との協働をめざし、積極的に地域との交流を図っていきたいと考えています。

今年度は、あらゆる機会を通して地域のみなさんに学校へ足を運んでいただき、生徒の活動を直接見てもらいたいと思っています。年間行事予定の太字の日を「みんなで行こさ 至民中へ！」の日とします。是非、学校においでください。

なお、各行事の案内は回覧板でその都度お知らせします。

「リーフレット趣旨説明」より

生徒が地域へ出て行く活動としては、これまでの取組に「福井を美しくする運動」と「社南地区体育祭の準備・後始末」のボランティアを加えてスタートした。

こういった取組は、地域のことを知らずしてことは進まない。地域との連携は、まずは地域を知ることから。地域といえば自治会であり公民館だ。5月16日（火）社南公民館に竹内館長を訪ねた。新しい至民中学校の構想、「みんなで行こさ 至民中へ！」の趣旨と協力依頼、今後の地域連携の進め方などについて説明をさせてもらった。そして、5月20日（日）には、自治会長会でも同様の説明をした。その時の趣旨説明の内容は次の通りである。

#### 今年度の取組に対する協力依頼

06.5.20(土)19:30 (於) 社南公民館

- 1 日頃の教育活動に対する深いご理解とご支援へのお礼
- 2 今年度の新たな取組
  - ①「挑戦！新至民中教育」
    - ～学力向上とワンランク上の質の高い教育を目指して
    - 朝読書、70分授業、ドリルタイム、ノーチャイム
  - ②「みんなで行こさ 至民中へ！」の日（学校公開）
    - ～学校を・生徒の活動を地域に積極的に公開
    - 区民の皆様へ学校へきていただき、子どもたちの活動を見ての感想や激励、指導
  - ③ボランティア活動の推進（ACTV）
    - 福井を美しくする運動（年3回）など
  - ④地域行事への積極的な参加
    - 来委員会各部会事業への参加促進
- 3 お願い
  - ①「みんなで行こさ 至民中へ！」の案内に回覧板利用
  - ②学校行事等のポスター掲示（集会場&掲示板）
  - ③ボランティア活動でのご指導



これまでになかったことをするわけで、まずは地域の理解と協力を得ることから始めた。とにかく、公民館には足繁く通った。自治会長会にもことある毎に出かけた。年度の始めと終わりは必ず出席しお祝いとお礼の時間をとってもらった。公民館長の意見を伺い、自治会長会で協力依頼をして実践に移すことを常に心がけた。

保護者に対しても、わが子に地域行事への参加、ボランティアへの参加を積極的に勧めるよう依頼をしたり、学級担任からも積極的に参加するよう呼びかけたりして地域で活動する生徒を増やすことにしたのである。

こういった取組に対して地域から嬉しい反応があった。一つは、「地区体育祭のボランティア」について、公民館長と自治会連合会長から「中学生のお陰でテントの準備や後始末が早く終わり、ありがたかった。地域の人たちも大変喜んでいた。」というお礼の電話が入った。また、合唱コンクールを参観した方からは次のような手紙が届いた。

先日は、小学6年生、至民中1・2・3年生達の合唱コンクールを参観させて頂き、本当に有り難うございました。毎日の練習成果がカー杯発揮出来ました事、生徒達はどんなに満足だった事と思います。もう80歳に手が届く年齢に達した私如き婆さんが見に行くとは、たまげた人間と、私自身も感じずには居られませんが、行きたくて、自然、至中の方へ足を運んでしまいました。社南公民館より配られてくる校訓も、しっかり校門に立てられている石碑も、この目で確かめました。校門に立つと同時に、心の引きしめる思ひでした。私は、社南国民学校しか卒業して居ません。知能も低い生徒でした。軍国主義の真最中に育ちました。何があっても君の為、国の為と諭されてきました。

このたび、至中の校内に入らせて頂き、もう一度この雰囲気の中で学び直して見たいとまで思ってしまいました。合唱では、指揮者一人に、全合唱員が一つになって注目し、とても素晴らしく感動致しました。感涙におせびました。そして、最後の閉会に、校長先生のお言葉にもことばにならない程の気持ちになり、目頭が熱くなりました。21世紀を託される生徒達よ「頼みますよ」と深く頭を下げたい気持ちです。

昨年夏休みに、舞屋町を通りましたら、舞屋町公民館の黒板に、小学高学年の書かれた標語だと思いましたが「誓います、悪い大人にならない事を」と書いたものが張り出されて居りました。我々老人として、恥ずかしくなりました。すべてを、子ども達は見て居ります。しっかりと日本人らしい人間の姿を保って生かさせて行かなければと思いました。つまらぬ事を書いてしまってお許し下さいませ。

御仏に恵み賜ひしこの命、無情の風に微笑みて行く 合掌

新至民中学校開校を見据えた取組によって、生徒が、学校が地域の人たちに少しずつ見えはじめたようであった。しかし、「常に異年齢の人たちが行き交う学びの場」にはまだこれからというところであった。

## （2）平成19年度

前年の取組をさらに充実・発展させながら、20年4月の開校を視野に入れた新たな挑戦が始まった。「異学年型教科センター方式」の試行も含めた取組が始まったのである。

至民中学校が目指す教育の方向性と内容をコンパクトに示したパンフレットの作成配布、企画開発委員会だより「学び舎」の発行、「親子で学ぶ70分授業」の実施、HPの充実、「学校説明会」の実施、「ギャラリー・しみん」の開設、社南地区納涼祭前日準備ボランティアなど、生徒が、教員が、学校がもっと見えるようになるための取組であった。

### 「学校説明会」

「保護者や地域の人たちは、新しい学校に対して関心が高い。新しく取り組もうとしていることをもっと詳しく知りたいとか、こんなことが不安だとか思っている人が多いと思う。地域に説明する機会を持つべきだと思う。」これは、平成19年の社南自治会連合会長山田健治氏からのアドバイスである。

新至民中学校について、保護者には説明してきたが地域の方々には今だ語ったことがなかった。

前福井市教育長 渡邊本爾氏は、「公立学校は、「地域学校」である。地域によって支えられ、地域の子どもの教育する。また、一方、地域の人々の心の拠りどころとしての学校であり、「おらが学校」としての長い歴史と伝統をつくり出す。」と述べている。

至民中学校は社南地区の学校である。地域の学校を地域の方々が知らないのでは地域の学校とは言えない。早速、「学校説明会」の計画を立て、3回に分けて公民館で実施した。地域の方々からは多くの意見やアドバイスをいただき、学校にとっても地域にとっても意義のある説明会となった。

山田会長は長く学校経営に携わってこられた方なので、それから後も何かとご意見を伺うことがあり、私にとって良きアドバイザーであった。山田氏には、今も「地域交流タイム」に参画するなどして学校を支えていただいている。

### 「親子で学ぶ70分授業」

授業参観は、福井市内の中学校なら何処でも行われている。たいがい教室の後ろで子ども達の後ろ姿を見ながら50分の授業を参観している。至民中学校は70分授業で、生徒活動が中心となるので見ていると長く感じるものである。そこで、保護者も生徒になって実際に授業を体験することで授業者の意図や至民中学校がねらっている学力を理解してもらおうという主旨で始まった。参加者からは、没頭してしまい時間が短く感じられたという感想を聞くことができた。

国語に参加した方の感想：国語の70分授業に参加させていただきました。子どもが自分の名前の意味を調べたり、名付けの意味を考えていました。後で親も子どもたちの横に行って一緒に話し合いましたが、照れくさいながらも楽しかったです。70分だと時間にも余裕ができて、考えることも話し合いもじっくり落ち着いてできるところがよいと思いました。

音楽に参加した方の感想：70分授業を初めて受けさせていただきましたが、時間で区切りながら集中力を途切れさせないように考えられたプログラムで進められていることがよくわかりました。久々に授業を受けさせていただきました、とても新鮮に感じました。思いっきり声を出して歌ってリフレッシュできました。

### 「ギャラリー しみん」の開設

新しい校舎には、「葉っぱのひろば」という地域交流エリアがある。「中学生も地域の人たちも互恵的に学びあう空間」の中核的存在となる場所である。この葉っぱのひろばの運営は新至民中学校に与えられたミッションの一つだ。

この「葉っぱのひろば」を「地域文化の発信・交流・発掘」をコンセプトとして運営できないだろうかと考えたのである。地域の文化にふれる場にしようというのだ。

私は、「文化」を核とした交流をねらいたいと常々考えていた。

なぜ「文化」なのか...？

進学（受験）と部活動に重点が置かれ、その周りを生徒指導で固めるという中学校教育の現状に、ドライな危うさを感じていた。もっと、生徒の心が潤う教育ができないか。それには生徒がいろんな文化に触れ、それに伴う人との交流が大切だと考えたのである。では、その文化や人はどこに求めるかということ、とことん地域にこだわりたいのだ。生徒の成長を支えるのは地域の人であり文化であり風土である。地域の文化に触れ、地域の人との交流を通して、自分のふる里を知る、そうした活動が今こそ大切だと思っていたのである。

また、生徒には「ふる里」への誇りと愛着を持ってほしかったのである。人生の節目節目に想いを馳せる「ふる里」を持ってほしい。ふる里社南の素晴らしさを語ることができるようになってほしい。地域との関わりがなければ「ふる里」への愛着も誇りも育たない。学校を開き、地域文化を核とした交流の機会と場を創り、ふる里意識を高めたかったのである。

地域の人たちにとっても、地域文化に触れる機会を通して、地域の人とのつながりが広がり、ふる里意識が高まることを期待したのである。

地域の文化にふれる場を「ギャラリーしみん」と名付けた。

ところが、地域の文化といっても皆目見当がつかない。地域のことなら公民館ということで、竹内館長に相談に乗ってもらった。「公民館で活動している自主グループでは、発表の機会が限られているのでもっと発表の機会を...と考えているようだ。」ということであった。社南公民館では28のグループが活動していた。その中から、作品を展示できるという条件で3つのグループに声をかけた。最初は尻込みしていたが、3グループ合同ということで作品展の開催が決まった。記念すべき第1回「ギャラリーしみん」は「ちぎり絵」、「パッチワーク」、「絵手紙」の合同作品展として、平成19年7月10日～20日、会議室で実現した。2回目は10月に「生け花」と「写真」のコラボによる作品展、3回目は12月に「五百崎智子作品展」と3回開催することが出来た。

なお、「五百崎智子作品展」は第2回「ギャラリーしみん」で生け花を出品した五百崎さんのお母さんの一言「実は、うちの娘、パリで絵を描いているんですけど...」から生まれた作品展である。人のつながりがこんな奇跡を生み出したのだ。さらに、一人の生徒が画家という職業に興味を示した。五百崎さんに手紙を出し、キャリア学習に役立てたのである。また、第2回「ギャラリーしみん」からは、飛山氏らが総合的な学習の時間のゲストティーチャーとして授業に招かれた。絵画・写真を通して地域の方々と生徒の交流が生まれたのである。

こうして、「地域文化の発信・交流・発掘」をコンセプトとした「葉っぱのひろば」の運営に一応のめどがたったのである。

平成20年2月、グループ展の代表者による、次年度に向けての打合会が行われ、次の年は各グループ単独での作品展を開催することになった。

「地域文化がちりばめられた学校に...」

生徒の心が潤い、優しさのある学校にしたい。豊かな感性と思いやりを育み、笑顔が似合う、他人に優しい、人情味のある中学生になってほしい。それには、学校の日常に心が和む環境が大切だと考えた。そこで、「葉っぱのひろば」をはじめ、学校のいたるところで、日常的に地域の文化に触れることができるようにしたかったのだ。

地域で活躍する作家の作品を常設しようというわけである。

作家の方々を訪ね、思いを伝え協力をお願いした。開校時には、写真、書、油絵が葉っぱのひろばに掛けられた。日展作家 村寄鴨畦先生の「書」、飛山哲増、橋本洋子両氏の「写真」、川井六太夫、佐々木岑生、五百崎智子氏らの「油絵」などが葉っぱのひろばの壁面を飾った。地域の

文化が常設される学校への歩みが始まったのである。

その後も、山田清吉氏の「彫刻」、パッチワークサークルのみなさんの協力できあがったタペストリーが並んだ。平成20年3月には、地元の医師灰谷氏より、100号の油絵が寄贈された。

そのほかにも、授業の紹介を中心とした企画開発委員会だより「学び舎」の発行、HPのリアルタイムでの更新など情報発信もさらに充実した。

平成19年度は、開校に向けシュミレーションや試行を重ねながらの1年であった。学校説明会や親子で学ぶ70分授業などを通して、新至民中学校の目指す教育を地域に周知する事が出来た。また、地域交流と「葉っぱのひろば」の運営についても方向性を見いだすことができた。平成20年度のソフトランディングに向けてのメドが立ったのである。

### (3) 平成20年度

ほとんど仕切りがないガラス張りのオープンな教室。ホワイトボードを囲んだグループ活動、オープンスペース、葉っぱのひろばやしみんホールを使用しての授業。

異学年型教科センター方式の学校が動き始めた。

リーフレット「平成20年度 福井市至民中学校」を全戸に配布。新生至民中学校がめざす教育活動の全容を明らかにした。そして、地域との関わりを一層深め、互恵的な地域連携を目指すこととした。新たな取組としては、「地域公開講座」の開設、「至民中学校ボランティアガイド」の誕生、「至民アカデミー倶楽部」の誕生と作品展、体験教室、講演会などである。

#### 「至民中学校ボランティアガイド」

「地域の学校を地域の方々が語る」「見学者を教職員が案内するのではなく、地域の人に案内してもらおう。」こんな発想から生まれたのが至民中学校ボランティアガイドだ。教職員は異動で変わってしまうが地域の方には異動がない。移転開校当時の感動は、その時を知る者が語りついでいくのが一番なのである。

こういった思いを地域の会合のたびに語りボランティアを募ってきた。最初に手を挙げたのは至民中学校同窓会と社南教育メディアのメンバーであった。

平成20年5月2日、第1回ボランティアガイド研修会が「しみんホール」で開かれた。講師は、至民中学校を設計した「設計工房 顕塾」の柳川奈奈氏。建築上の特徴や設計の基本的な考え方などについてレクチャーを受けた。研修会は5回行われた。5月16日、テーマは「コースをまわろう」、内容は「コースを回って場所をも身につける 使われ方の様子を調査 その場所での紹介内容を思い出してみる。5月23日、テーマは「3つのポイント」のおさらい、内容は「よその学校との違いを確認、3つのポイントについて、現地を回りながらおさらい」5月30日は、それぞれが実際に回っての現地訓練であった。そして、6月6日、小松市教頭会のみなさんを相手にいよいよ実践が始まったのである。

それ以後も、毎週金曜日13時～15時、「しみんステーション」で日程調整も含めた研修会を続けている。単に施設の案内だけでなく、新しい中学校建設に関わるコンセプト、ねらいとする教育活動とその意味、生徒の日常の姿を紹介する等、多岐にわたる活動を行っている。また、授業を参観したり、集会で生徒に語りかけたり、1年生を案内したりと生徒との関わりも大切にしている。前述の渡邊氏の言う「地域学校」、「地域に根づく学校」であることを実感できる取組が展開されているのである。

ボランティアガイドに参加しようと思った動機を次のように述べている。

- 学校用地交渉に関わる中で、「良い環境の、良い学び舎で、健やかな生徒が育って欲しい」と常に念頭にあった。今もこの思いは熱く、ガイドメンバーの中で学校所在地の者は不可欠と思い、浅学非才を省みずトップセールスに呼応した次第。
- 声を掛けていただいたのは、開校式典の時だと思います。想像以上に素晴らしい学校内外に感激し、元々建築物が大好きで、設計された柳川さんにも詳しく説明していただき、益々興味が湧いてきました。同窓生として、自分の勉強？も兼ねてのお手伝い出来るなら参加させていただきたいと思いました。
- 私自身は当校の卒業生ではなく、娘二人がお世話になった者でPTAの立場上何かのお役にたてればと軽い気持ちがここまでこられたかと思われまます。
- 地域と学校・生徒たちの為になると思い、参加することになりました。私自身としては、たいしたことはできないと思いますが…。
- 新しい「学校(教育)方針」に賛同し、地域のためにも何か協力できればと思い、参加させていただきました。至民中学校への関心の深まりからだと思います。
- 頼まれて断れなかったのも本音だが、我が子が通った学校でもあり、気にかかった。こんな年輩者でも何か手伝えるならばと思ったから。
- 学校であって学校でない建物にとりつかれ、私も56年大工をしてきて、今までになかった学校をボランティアガイドをしながら考えてみたいと思ったからです。

ボランティアガイドのみなさんへのアンケートに対する回答の抜粋である。学校のため、生徒のため、地域のためにお手伝いをしたい、何かのお役に立ちたいという熱い思いが伝わってくる。その後の活動ぶりを見ても、ガイドのみなさんはとにかく熱心なのだ。ガイドだけではなく、先進校視察や体験学習のコーディネート、災害誌の編集・発刊等精力的な活動が続いていくのである。

#### 「至民アカデミー倶楽部」

「葉っぱのひろば」の運営に一応のめどがたったとはいうものの「地域文化の発信・交流・発掘」に拡がりを持たせたかった。平成19年10月に「写真」で作品を出していた飛山哲増氏が「ギャラリーしみん」に興味を示しているという情報があったので思いの丈をぶつけてみた。「地域文化の発信・交流・発掘」という考え方や至民中学校の取組に賛同され一肌脱ぐということになったのだ。

#### 至民アカデミー倶楽部へのお誘い

私たちは社南の文化の発掘・発信・交流などを通して地域文化の向上に寄与することを目的に活動しています。主な活動は至民中学校の「葉っぱのひろば」での作品展です。学校祭の機会に行っています。

こういった本会の活動にご賛同いただける地域の方々のご参加をお待ちしています。一緒に中学生との交流を楽しもうと思われる方は下記まで連絡してください。

連絡先 飛山哲増（倶楽部代表）

これは、公民館だよりに載せた広報原稿である。

社南公民館を拠点に活動している自主サークル、地域の書道教室、個人で文化的な活動をしている人たちなどによって、「至民アカデミー倶楽部」が結成された。

そして、学校祭を舞台に、第1回目の至民アカデミー倶楽部作品展が開催された。彫刻、書、

油絵、写真、フラワーデザイン、生け花、古民具など地域の文化が「葉っぱのひろば」一杯に展示された。

400名を超える地域の方々が来校した。古い秤を使った「はかる」体験、作品展の鑑賞、生徒との会話など素敵な時の流れを体感する機会となった。地域の人たちも、生徒も、心和む優しい時間を共有できたのだ。

前述の渡邊本爾前福井市教育長は「新しい至民中学校は、校舎そのものに「地域交流棟」としての役割を担わせて、日常的に地域と連携していくことを目指している。それは、「地域文化」との交流であり、生徒たちによる「地域文化」創造への橋掛かりとなるものである。学校内にのみ向かいがちな中学生のエネルギーを地域交流棟における文化活動として交流を拡大していくことで、学校だけでは獲得できない学びを達成できるものと考えるのである。」と述べている。

「学校だけでは獲得できない学び」がこの学校祭で少なからず達成できたと思った。それは、至民アカデミー倶楽部代表 飛山哲増氏の次のコメントからもうかがえる。

至民アカデミー倶楽部は地域との交流の一環として、校区のアマチュア作家（絵画、書道、写真）、生け花、ちぎり絵、パッチワーク等の趣味グループ、古民具など伝承文化保存会の方々に呼びかけて発足した。そして初めて学校祭に参加したのである。

新校舎のしみんホールは広いスペースと吹き抜けの大きな空間で作品展示には格好の場所である。この展示コーナーでの生徒達の反応はわれわれの励みになった。絵画や写真の前では「俺ならこうする」「何を描いた？」と男同士の辛口批評、生け花を眺めながら「やってみたいな」とささやく女の子。また「計る」をテーマに時代ものの計測器などを並べた体験コーナーでは、実際に重りをつけてやってみるがデジタル万能の子らには苦戦が見られ、おじさんのアドバイスを受けてたりして会話が生まれた。

そして、生徒達の美術や技術の学習成果である作品が隣接して展示された。生徒達の作品には若い感性と五感の鋭さがにじみ出ている、老化をたどっている我々の右脳に刺激を与えた。そして、自分自身の創作活動にも常に新しい息を吹きかけなければならないと感じた。

このような協働的な企画をすることで、成長過程にある生徒達が将来の人生の楽しみ方や励みの見つけ方、生涯学び続けることなどを認識してくれればと小さな期待を込めている。そして何よりも、我々が生徒達から若い力と励みを頂いたように思う。

至民アカデミー倶楽部作品展は大勢の地域の人たちが当たり前のように校内を行き交い、生徒と交流する情景を創り出した。「学校を街角」がその姿を現したのである。

#### 「地域公開講座」

前年実施した「親子で学ぶ70分授業」の拡大版として実施。地域の人たちも授業に参加し、生徒と一緒に学ぶ授業である。1・2年の全学級で実施した。地域の人たちは中学生と一緒に学ぶことで知的活動に触れることができると同時に、中学生は地域の人たちが学んでいる姿を目の当たりにすることで学ぶ意義を感じとれるのではないだろうか。

「みそ汁にだしは必要か」「至民中学校校歌を書で書こう」「シューベルト『魔王』の魅力を探ろう」「ふるさと福井の人々を学ぼう」といった魅力あふれる講座が開かれた。小学生、保護者、地域の方々を含め約200人が参加、活気にあふれる公開講座となった。

#### 「体験教室、講演会」

「ギャラリー しみん」から新たな交流が生まれた。「パッチワーク体験」、「五百崎智子絵画教室」、講演会「五百崎先輩の生き方に学ぶ」である。

#### パッチワーク体験

パッチワークサークルのみなさんの指導で全校生徒、全教職員がパッチワークを体験した。一人ひとりがメッセージと名前を書いた小さな布を縫うのである。この布は後日サークルの皆さんの手によって1枚の大きなタペストリーとなって戻ってきた。そして今は、葉っぱのひろばの壁面を飾っている。

#### 五百崎智子絵画教室&講演会

「五百崎智子作品展」の期間中、五百崎さんによる絵画の指導教室が3回開催された。美術部の子ども達が中心であったが、地域の方の参加もあり、新しい形の交流が実現したのだ。

また、「五百崎先輩の生き方に学ぶ」と題しての講演会も実現した。五百崎さんが画家として歩んだ道や生き方、故郷への思いなどを聞くことが出来た。生徒には、自分の生き方を考えるいい機会となったようだ。「人生は思い通りにいかないのが当たり前、当たり前とっていると落ち込まない」という言葉が今も印象に残っている。五百崎さんは、この年の交流について「一流を目指して」と題してコメントを寄せてくださった。

#### 一流を目指して

去年の七月に絵画作品展、講話、絵画教室をさせていただきました。一人で絵を描くときと違う点は、他人との関わりが生じることで、それは私にとっては絵を描くときに使う頭とは別の頭を使うのでエネルギーを要します。常に緊張感やストレスが生じ、責任も伴います。（特に私のような）先生としての経験や知識がないものが、まだ非常に若い多くの可能性を秘めた中学生たちと交わりを持つという取組は、冒険でもあると思います。

私は高校二年ごろから絵の勉強を始めました。単純に計算すれば、二十年ほど絵を描いていることになります。いまだに自分で納得のいく絵を描けていないという現実があります。自分の勉強不足や不熱心さを思います。絵には描く人の考えや性格また感情など自然に表れてくる、うそをつけない性質があります。まだまだ何か足りないのです。一流を目指し、また見る人の心が生き生きする絵を描くことができればと思います。それでなければ見ていただく価値がないと思うからです。

このような新しい冒険的な取組が、よい意味での緊張感や影響を与えることができ、一人一人が、それぞれの場所で世界に通用する、また一流を目指すきっかけにもなればと期待しています。

「見る人の心が生き生きする絵を描くこと」を目指している母校の先輩が後輩達に期待するのは「世界」と「一流」だということだ。ふる里の先輩のとてつもなく大きな期待を生徒はどのように受け止めたのだろうか…。この講演がきっかけとなって、世界に大きく羽ばたいてほしいものである。そして、生徒の中から、ふる里の先輩として母校の演台に立ち、自分を語ってくれる日が来ることを期待して止まない。そんな日が実現すれば、至民中学校の目指した地域連携の極みといえるのではないだろうか。

## 6. 私の地域連携

地域の人にとって「中学校は敷居が高い」というのだ。私の地域連携は「敷居を低くする」こ

とから始まったのである。

そのための方策は、次の4点である。

地域の方々が学校へ足を運ぶ機会をつくる

生徒が地域で活動する機会を増やす

情報発信の充実

校長は、地域行事、各種会合には必ず出席し、生徒を、教員を、学校を語る

生徒、教員、学校が地域に見えるようにすることで敷居を低くしようと考えたのである。

また、新至民中学校の教育、学校の現状、生徒の様子、学校行事や部活動などの情報を「おたより」や「HP」で発信し、地域の理解を得るのである。

さらには、これは校長にとって最も重要な役割であるが、自治会長会をはじめとした地域の会合・行事には積極的に参加し、新しい至民中の構想を、生徒を、教員を、学校の取組を語り協力を要請してまわるとともに、地域人材や団体とのパイプを広げたのである。

「地域との連携は顔を売ること」

地域との連携には、地域の代表者の方々の理解と協力が欠かせない。特に、公民館長、自治会連合会長との連携は最も大切にしなければならない。足を運び、話す機会を持つことである。また、自治会長会にも出席し、学校の現状をお知らせしたり、協力をお願いしたりしてきた。地域の行事や会議等への出席を求められたときは学校を宣伝する絶好の機会であり、地域の各種団体の方と顔見知りになる願ってもない機会なので必ず出席した。校長の顔を売ることが「敷居を低くする」はじめての一步かも知れない。

私が至民中学校で地域との連携を進めるうえで恵まれていたことは、社南公民館長が竹内寛氏であったことである。竹内氏は、かつて福井市教育委員会に出向していた時の上司だった。人との繋がりに感謝である。

「地域連携は校長のトップセールス」

地域との関係を築く上で校長の言動が、その正否を大きく左右する。特に新たな取組を始めるときには、その存在が重要なのである。地域との関わりを進めるには、ある程度の時間と労力がある。校長は時間の融通がきき、時間の確保もしやすい。また、校長という立場は一目おかれるので、最初の一步を踏み出し道筋をつける役割に適しているのである。「みんなで行こさ 至民中へ!」「至民中学校ボランティアガイド」「至民アカデミー倶楽部」「ギャラリー しみん」などの地域連携に関わる新たな取組も、その道筋をつけ、基盤を創る役割を担ってきた。それ後は、運営部会Aを中心に改善を加えたり新たな取組に挑戦したりしながら推進された。

## 7. 地域との連携を振り返る

平成21～23年度の研究紀要をひもときながら、新至民中学校開校2年目以降の地域連携の足跡を進化の状況を確認してみたい。

平成21年度以降、至民中学校は、地域の人たちや文化との触れ合い・交流を通じた互恵的な連携を柱に、「日常性」「継続性」を視野におきながら、地域連携のさらなる進化を目指したという。

その中で、最もインパクトのあった取組は、平成21年度から始まった「地域交流タイム」であろう。前年度の「至民アカデミー倶楽部作品展」が体験を通してふれ合う活動へと新たな展開をみせたのだ。

「郷土料理」「そば打ち」「絵手紙」「ちぎり絵」「着付け教室」「和太鼓」「太極拳」「和菓子&



お茶」「葉寿司をつくろう」「福大生による実験」「茶道教室」「縄ないをしよう」「水墨画」「アレンジフラワー」の14の体験・交流ブースが設けられた。講師は地域の方々がほとんどで、総勢70名超、参加者は当日参加の地域の方々を含め約500名だったという。地域の方々と生徒が地域の文化を介して世代を超えた交流が実現したのだ。

「こうした姿は、地域交流エリアである「葉っぱのひろば」の理想型を彷彿とさせるものであった。また、大人と子どもと一緒に体験活動を楽しんでいる様子は、学校であることを忘れさせるものであった。」と研究紀要で述べられているように、これぞ「学校は街角」の姿だったのだろう…。

毎年、新たな体験ブースが加わり、地域の方々との体験・交流が続いているという。平成23年には、地域交流タイムを経験した卒業生が講師として帰ってきた。福井商業高校「ジェット」と藤島高校ジャグリング部のメンバーだ。卒業生が地域の一員として後輩と体験・交流を楽しんだという。こういった活動が継承され、地域の文化として根付いていくことを期待したい。

また、各ブースに受講生リーダー（生徒代表）を配置し、講師との事前交渉、当日の挨拶、片付けを担当するなど、生徒と地域の人たちが一緒になって講座を運営するようになったという。生徒と地域の方々とが一体となって「街角」を創りあげていこうとしているのだ。

2つ目は、「ギャラリー至民」の新たな展開である。

かねてからの目標であった、生徒の身近な存在である高等学校、大学との交流が実現したという。嬉しい限りである。

平成21年 科学技術高等学校テキスタイルデザイン科作品展

福井大学美術科作品展

平成22年 福井高等学校美術科作品展

平成23年 仁愛女子高等学校作品展

また、「ギャラリー至民」の準備や広報をクラスターの活動に位置付け、作品展開催の裏方を受け持つようにしたという。鑑賞会もクラスター単位で行い、感想を書いた「感想シート」を生徒や作者と共有するなどの取組が行われるようになった。

3つ目は、「みんなで行こさ 至民中へ！」に新しい企画が加わったことである。

普段のままの学校生活を生徒とともに味わってもらおうと、「給食を食べに行こさ 至民中へ！」「そうじしに行こさ 至民中へ！」「もっと知ろさ 至民中を！」が開催されたことだ。

そして、漢字検定試験の実施である。社南小学校、社南公民館、地元の書店の協力を得て広報・申込受付をした結果、小学生7名、地域の方2名、生徒60名の申込があったという。

様々な形で地域との交流があっという間と思うのである。これまでの概念をぶっ壊して、挑戦することからしか地域も、学校も、生徒も育ち成長する地域連携は生まれてこないのである。漢検は、教科の学びから生まれた地域連携の新しい形である。これからは、教科が地域連携の重要なファクターとなっていかなければならないのではないだろうか。

もう1つ、至民中学校の地域連携になくはない存在となっているのが「サポート至民」である。

平成22年度末、活動内容をこれまでの学校教育活動への支援の一層の充実は言うに及ばず、生徒を支援する活動も増やしていきたいと、名称を「サポート至民」に変えたという。

具体的な取組としては、「地域ふれあい体験活動：さつまいもを植えてみよさ！掘ってみよさ！」「公開研究会前の下草刈り」環境改善要望書の市教委提出と開校記念に植えられた桜の木の植え代え」「文集 『先人に学ぶ - 災難を乗り越えて - 』の編集・出版」などである。

中でも、文集「先人に学ぶ - 災難を乗り越えて - 」は、時がたてば立つほどに風化されてしまいがちな痛ましい災禍を後世に残したい。ふる里の未来を託す後輩達に、幾多の苦難を乗り越えて

ふる里の今があるということを伝えたい。という「サポート至民」から生徒へのメッセージである。道徳の授業などに生かしてほしいと50部を学校に寄贈した。

その他にも、地域ボランティア活動に「スタンプラリー」を取り入れたことや国語エリアに新たに書の大作が常設されたことなどがあげられる。

ボランティア参加者数は延べ453名(全校生徒414名)、1回以上の参加者253名、4回以上参加者(校内ボランティア賞)21名を数えるまでになったという。(平成22年実績)

新たな作品は、至民中学校の卒業生で、一昨年の県書道展で知事賞を受賞するなど若手の書道家として活躍中の平馬季三代氏の作品である。同窓の先輩の大作は、生徒の心を和ませるであろうし、与えるインパクトは想像以上に大きいものがある。これは、「学校の至る所で、日常的に地域の文化に触れることができるようにしたい」という願いから始まった取組の一環である。五百崎さんの作品も一定期間毎に今も掛け替えられているという。

## 8. おわりに

至民中が目指した地域連携は、「学校は街角」という発想で、「常に異年齢の人たちが行き交う学びの場」とするというものであった。日常的な交流を通して中学生も地域の人たちも互恵的に学びあう学校にしようというのである。

私たちは、「生徒、教員、学校が地域に見えるようにすること」から始めた。地域の人たちに学校へ足を運んでもらい、学校を丸ごと見てもらう「みんなで行こさ 至民中へ!」、そして、我々が地域に出て行って見てもらう「地域行事への参加と地域ボランティア活動」に取り組んだのである。

次には、地域交流棟「葉っぱのひろば」の運用も視野に入れた「ギャラリーしみん」の開設に踏み切った。これは、子ども達の心に潤いを運びたい、気持ちの優しい中学生になってほしいという願いを込めた取組でもあった。

この地域文化に触れる取組が発展して「地域交流タイム」が生まれた。地域文化に触れるだけでなくそれに伴う地域の人たちとの交流が「葉っぱのひろば」を中心に展開されるようになったのである。「学校は街角」になり始めたのであった。

至民中学校の教育を理解してもらおうと始めたのが「地域公開講座」である。小学生から大人まで、地域住民と一緒に学ぶのである。学びを通じた互恵的な地域連携といえよう。

こういった取組は、毎年工夫され、内容が充実し進化し続けている。それは、至民中学校の先生方の柔軟な発想、素敵なアイディアの成せるところである。そして、「前例踏襲厳禁」の精神が、学校文化として、教師文化として継承されていることを強く感じるのである。

進化し続けているのは、公民館との連携が年々深くなってきているからであろう。地域交流タイムに社南公民館自主サークルのブースが増えてきていることがそのことを物語っている。地域のことといえば、何といても公民館である。公民館との連携が地域連携には欠かせない。公民館も、クラスターの旗を掲げるなど学校を支えていることを目に見える形で示していることは心強い限りである。これからも築き上げてきた良好な関係を大切にしていってほしいものである。

地域連携の極みは「学校はなんていいことをしてるんや、ほんならうららも一肌脱ぐか...」と、地域の人たちが学校の取組に賛同してアクションを起こしてくれるようになった時である。

それが、「サポート至民」であり「至民アカデミー倶楽部」「ギャラリー至民」「至民アカデミー倶楽部作品展」「地域交流タイム」である。地域と至民中学校の誇りとするところのものである。さて、「学校は街角」となり得たか...?

これまで述べてきたように、互恵的、日常的な地域連携は、「地域公開講座」「地域交流タイム」

「ギャラリー至民」「みんなで行こさ 至民中へ!」「サポート至民」、「授業や異学年活動における生徒との日常的な交流」などとなって結実し、多くの異年齢の人たちによる学び合いが恒常的におこなわれていることを見れば、明らかに「学校は街角」となっている。

特に、「サポート至民」は、これまでの学校では聞いたことも見たこともない組織であろう。その活動内容も前例を探ることができないのではないだろうか...?この「サポート至民」の存在が「学校は街角」の創出にも大きく貢献していることは誰もが認めるところであろう。これからの「サポート至民」の動きを楽しみにしたい。

研究紀要2011、運営部会A(地域連携)のまとめで「中学校で学んだことが、一生涯の学びや幸せにつながっていくものであることを信じて、今後も地域との「学び」を意識した連携に研鑽を積んでいきたい。」と述べている。

これからの「地域との「学び」を意識した連携」によって、新たな「異年齢の人たちが行き交う学びの場」が創出されるであろう。創造的な「学校は街角」の出現に胸躍らせながら終わりとしたい。

#### 【参考文献】

福井市至民中学校「平成18年度 研究紀要」2006年

福井市至民中学校「平成19年度 研究紀要」2007年

福井市至民中学校「平成20年度 研究紀要」2008年

福井市至民中学校「平成21年度 研究紀要」2009年

福井市至民中学校「平成22年度 研究紀要」2010年

福井市至民中学校「平成23年度 研究紀要」2011年

渡邊 本爾「新しい至民中学校に期待するもの」『建築技術6月号』株式会社建築技術,2008年

津田由起枝「私の学校経営 - ミッションを意識した学校づくり⑤」日本教育新聞2011年6月20日付

牧田 秀昭「授業改革を核とする学校改革 - 新至民中学校への軌跡 - 」『教師教育研究Vol2』福井大学大学院教育学研究科 教職開発専攻(教職大学院)「教師教育研究」編集委員会,2009年

門川 大作「京の人づくり - 人づくりの美、ものづくりの美」『京都発 地域教育のすすめ』 ミネルヴァ書房,2005年

山下忠五郎「地域と協働する学校づくり」『建築が教育を変える - 福井市至民中の学校づくり物語 - 』鹿島出版会,2005年